罪深き海辺

い。

平日の午後とはいえ、この終点、山岬駅で電車を降りたのは、男の他には六十代の男女がそれぞれひとりずつしかいない。二人は、ロータリーに止まっていた、家族と思(おぼ)しい人間の軽自動車に乗りこみ、とうにいなくなっていた。

ツクツクボウシの鳴き声が激しくなった。

ロータリーの端に小さなコンビニエンスストアがあり、その前にカラスが二羽いた。そのうちの一羽が口をきいた。

「何見てんだよ、おっさん」

カラスに見えたのは、今どき見ることの少なくなったガングロ少女だった。高校の制服らしい黒スカートを極限まで短くし、コンビニエンスストアの店先にすわりこんで、アイスクリームをなめている。

アロハシャツの男は再びあたりを見渡した。周囲にいる人間といえば、土産物屋の奥で居眠りする婆さんくらいだ。

「おっさんて、俺か」

男はのんびりした口調で訊(き)き返した。

1

「やまみさきぃ、終点、やまみさきぃ、です。どちらさまも、お忘れもののないようにお降り下さい」

駅前のロータリーにはほとんど人けがない。九月の終わりにしては強い陽ざしが注いでいる。

駅舎の階段を降りてくると、まず目についたのは、白っぽい土産物屋だった。白っぽいのは、長年の風雨で、看板の文字が薄れているからだ。

男は手にしていたリュックに腕を通し、背中に担いだ。アロハシャツにジーンズといういでたちで、薄いサングラスを通してあたりを見回している。がっしりとした体つきだ。

土産物屋のガラス戸は半分開いていて、老婆がひとり、店番にすわっていた。並んでいる商品は、佃煮や海藻の乾燥品などで、薄れた看板に記された「鮮魚、さざえ、あわび」など、店内のどこにもな

「そうだよ、今、パンツのぞいたろう」
ガングロの少女はとがった声をだした。かたわらにいるもう一羽のカラス、ガングロ二号は、関心なさげにアイスクリームをひたすらなめている。
「知らんな。そんなことより、新港町(しんこうちょう)にはどうやっていく？」
「ざけんなよ！　人のパンツ見といて、何とぼけてんだよ。金だせよ」
少女は立ちあがった。弾みで本当に下着が見えた。妙に大人びた水色のショーツだ。男は思わず目をそらした。
少女はつかつかと歩みよった。鼻も目もまん丸で、まっ黒に焼けていなければ、それなりに愛敬のある顔立ちだろう。
「痛い目にあいたくなけりゃ、金だしな」
アイスを左手にもちかえ、少女は右手をだした。手首にはタトゥが入っていて、両耳にはピアスがあわせて六本、はまっている。
「参ったね。はるばる二時間、電車に揺られて、やっとたどりついたと思ったら、いきなり女子高生にカツアゲされるとは」
男は明るい口調でいった。そのとき、コンビニエンスストアの扉が開いて、坊主頭で小柄の男子高校生が姿を現わした。黒のズボンをこちらも極限までずり落としている。ベルトがほとんど膝の上あたりにあり、シャツの裾から派手なチェックのトランクスが丸見えだ。
「シンゴ、あのおっさん。やっちゃいな」
入れちがいに店の入口をくぐりながら、ガングロ二号が舌足らずな口調でいった。
「あーん？」
男子高校生は、男とガングロ一号をふりかえった。こちらは鼻と下唇にピアスが入っていて、顔も目も三角形の凶悪な人相だ。シャツのボタンもほとんど外れているので、薄い胸に浮いたアバラと、そこだけは見事な腹筋が丸見えだ。
「シンゴ、こいつやっちゃってよ」
ガングロ一号もいった。
「なんで」
シンゴと呼ばれた男子高校生が訊いた。

「あたしのパンツ見たのに、金払わないの」
シンゴは舌打ちした。面倒くさげに歩みよってくる。ズボンをおろしているので、まるでペンギンだ。
「おっさんよう、払ってやんなよ。千円でいいよ。な」
男はカラスとペンギンの顔を見比べ、大きくため息をついた。
「暑くてたるいんだよ、頼むよ。払って」
シンゴがいう。
「シンゴさあ、ボクシングのインターハイで、県二位なんだよね。おっさん畳まれちゃうよ」
ガングロ一号が楽しげにつけ加えた。男はせつなそうに首をふった。
「プロになろうと思ってんのか」
シンゴに訊ねた。
「関係ねえよ。払うのか、払わねえのか」
「お前、ろくなもの食ってねえだろ。今はそれでもいいがな、プロになったらスタミナがもたねえぞ——」
シンゴがやにわに拳をつきだした。キレのいいストレートを男の腹に叩きこむ。男は首を傾げた。シンゴの目が丸くなる。
「だから食えっていってんだよ。パンチが軽いんだよ」
男はほがらかにいった。
「このう」
シンゴはズボンをずりあげ、ステップするとファイティングポーズをとった。シュッと口で息を吐きながら、男の顔めがけてジャブを放った。
男はひょいと首を傾けてそれをかわした。にっと笑う。
「あれ？　か」
「シュッ、シュッ、シュッ」
ジャブ、フック、ストレートと、シンゴがくりだしたパンチはことごとく外れた。シンゴは呆然としたような表情になった。汗が噴きだし、シャツが背中にはりついた。
「県二位は無理だな。いいとこ、ベスト8だろう」
男は白い歯を見せた。
「この、クソオヤジがっ」

シンゴは金切り声をあげ、回し蹴りを放った。それを男は簡単に左腕でブロックした。
「おいおい、今度はキックボクシングかよ。蹴りも駄目だな」
シンゴの足首をつかむとほいっと声をあげた。シンゴの体が宙に浮いた。尻から地面に落ちる。
起きあがろうとしたその胸板を、男は右足で踏んだ。
「よせよせ。お前じゃ勝負にならない」
「くそっ、この、オヤジがっ、手前、離せっ」
シンゴは顔をまっ赤にして叫んだ。両手両足を使って起きようとするのだが、背中は地面に押しつけられて、びくともしない。
「離れてもいいけどな。千円とらないって約束してくれるか。おじさん旅行中で、あんまり金ないんだ」
「ふざけんな、この——」
男の口調がかわった。いきなりシンゴの下唇をつかむとひねりあげる。
「おい、この洒落たピアス、お前の唇ごとむしりとってやろうか」
「痛て、いいい……」
シンゴの目に恐怖が浮かんだ。
「どうする？　え」
男が手に力を加えると、シンゴは魚のようにのたうち回った。右足はとうに胸から外されている。
「はがった、はがりましたあ」
男は手を離した。シンゴは地面の上で丸まった。肩で息をし、汗をぽたぽた垂らしている。
ガングロ一号が大きく目をみひらいて、あとじさった。
「そんなぁ」
「ま、おとなと子供って奴ですかね」
男はにっと歯をむきだした。
「参りましたっ」
いきなり大声でシンゴが叫んだ。地面に手をつき、頭をこすりつける。
「勘弁して下さい、先輩！」
「いきなりクソオヤジが先輩かよ」
男は笑いだした。

「勘弁して下さい。すいませんでした、本当に」
シンゴはひれ伏しつづけた。
「もういいよ。立ちな」
いわれて、立ちあがる。男をまじまじと見つめた。
「俺、今まで喧嘩で負けたことなかったっす。組の人だって、俺に一目おいてくれてたんす。先輩、すごいっす」
「だから先輩っていうな」
「でも名前、わかんないっすから」
「ホシバだ。干すに場所の干場」
「干場ぁ」
素っ頓狂な声をあげたのは、ガングロ一号だった。
「おっさん、干場っていうの」
「それがどうした」
干場と名乗った男は少女をふりかえった。
「干場ってさ、この町に一軒しかないんだよね。干場の殿さまん家」
「殿さま？」
男はあきれたようにいった。
「殿さまって、イクミのばあちゃんが働いてたとこかよ」
シンゴが少女を見た。イクミという名らしい。
「そう。もうずっと前に死んじゃってさ、屋敷とかも全部なくなっちゃったんだよ」
シンゴが干場に目を移した。
「それって新港町にあったのか」
干場が訊ねると、イクミはこっくりと頷いた。
「お屋敷はさ、海辺に建ってて、すごい立派だったって。今はぜーんぶ潰して、マリーナになってる」
「誰もいないのか」
「いないよ。殿さまには家族がいなかったもん。おばあちゃんがずっと世話してたんだよ」
干場はイクミを見つめた。
「おっさん、殿さまの親戚？」
イクミが訊いた。干場はとたんに情けない顔になった。
「どうかな、自信がない」
「何だよ、それ」
シンゴがいった。
「自分の親戚のことも知らねえのかよ」

「ガキの頃に親に死なれてな。あんまりよくわからないんだよ。この山岬の出だって、聞いてたくらいだ」
「じゃ、殿さまの親戚じゃないの。干場って家、一軒しかなかったのだから」
「そうかな」
干場はいって、顎をかいた。
「お前のばあちゃんて、まだ元気なのか」
「元気だよ。叔母さんとこの店、手伝ってる」
「店って」
「スナック。駅裏の飲み屋街にある――」
いって、イクミは背後をふりかえった。そこには線路を隔てるフェンスがあり、たてよこ二メートルくらいの看板がかかっていた。
「ようこそ、海の町、山岬へ。山岬観光マップ」と記され、横にしたヒョウタンのような山岬市の地図が描かれていた。
ヒョウタンは右下・南東方向を向いている。くびれの西側、大きいほうの楕円が「岬町」で、左上の北西から走るＪＲの線路がまん中を走っていた。線路はヒョウタンのまん中、くびれのあたりで終わっていて、それが今いる山岬駅だ。
くびれの東側の、ひと回り小さな楕円には「新港町」と書きこまれている。
地図で目につくのが、ふたつの港のマークだ。岬町の南側の海に向かってつきでているのが「山岬漁港」、新港町の南側にあるのが「山岬マリーナ」である。山岬駅の北側には、線路と平行して走る道路がある。線路は駅で終わっているが、道路のほうはさらに南東方向にのびて新港町を貫いていた。駅と道路をはさんだ反対側に「市役所」と「警察署」の表示があった。
海水浴場を示す、旗竿のマークが新港町の西側にあって、その少し北西寄りに、新たに書き足されたと思しい「山岬水族館」という表示と下手くそなイルカの絵があった。
干場はしばらく看板に眺めいった。
「なるほど、こうなってんのか」
そして二人をふりかえった。
「お前らはどこに住んでるんだ」

「あたしは新港町。シンゴのいる岬町は漁師町だもん、古い家ばっか」
イクミが答えた。
「はーん」
干場は「山岬観光マップ」の端に描かれた「山岬半島全図」に目を移した。たいして施設の多くない山岬市のマップに比べても、控えめな大きさだ。だがその理由は、半島の形にあった。
半島だけを見ると、海につきでたキノコ型をしている。というより、やはり地図の横に誰かが落書きした「チ○ポ」という表現がぴったりだろう。キノコでいえば笠にあたる部分の中央が微妙にくぼんでいるところもそのままそっくりだ。そのくぼみこそが山岬湾で、山岬市のヒョウタンの南側のくびれにあたる。
キノコの石突きの部分はほとんどが山で、西側の海に面した平地を線路と道路が分けあっている。道路は東側の海沿いも走っているが、線路は西側だけだ。山岬駅が終点になる理由だった。
「本当、やらしい形だよね」
イクミがアイスクリームをくわえていった。
「お前、そのカッコでいうなよ」
シンゴがつっこむと、
「なんでよ！　シンゴこそやらしい」
と眉を吊りあげる。
「で、新港町にはどうやっていくんだ」
「市営のバス。あたしたちもそれ待ってるの。一時間に一本なんだよね」
「歩いたらどれくらいかかる？」
「新港町のどこまでいくのに？」
シンゴの問いに、干場は無言で「山岬マリーナ」を指さした。
「四、五十分くらいじゃん」
「なんだ、だったら早くいえ」
干場はこともなげにいった。
「観光がてら歩いてくことにしよう」
「なんもねえよ」
シンゴがあきれ顔になった。
「そんなことないだろう。水族館や海水浴場がある」

「水族館はくそつまんねえし、海の家は畳んじゃったぜ」
「そうか。そうだな。九月だものな」
「海の家やってんの、俺の知り合いの、組の人なんだ」
シンゴは自慢げにいった。
「組って漁業組合か」
「ちがうよ！　何いってんだよ。やあさんだよ、やあさん！　岬組っていうんだよ」
干場は首をふった。
「説教がましいことはいいたくないがな、青少年がやくざ屋さんと仲よくして得なんかないぞ」
シンゴは聞こえなかったように空を仰いだ。それを見つめ、干場は息を吐いた。
「まあいい。機会があったらまた会おう」
そのまま、人も車もない、駅前の道に歩みだした。
「ちょっとお」
その背中にイクミが叫んだ。
「おっさん、しばらく町にいるわけ？」
返事は歩きながら掲げた右手だった。

2

半島の外周をぐるりと回る道とは別に、駅を起点とする道が東西に海沿いを走っている。
干場が歩き出したのは、駅をでて左、南東方向に湾曲した道だった。地図によれば、半島の中央を走るのが県道で、より海沿いを細かく走っているのが市道らしい。単なる移動なら県道だろうが、生活道路としては市道のほうが便利だ。
実際、駅を離れて五分もすると原付バイクや軽自動車の交通量が多くなった。理由はさらに十分ほど歩いて水族館の前まできてわかった。小さなスーパーや魚屋、クリーニング店といった商店街が市道沿いに形成されているのだ。
軽自動車の路上駐車がつづいている。おそらくは新港町の住民の需要をこの商店街が満たしているのだろう。スーパーには駐車場が併設されているが、

使っている者は少ない。皆堂々と路上駐車をして、買い物をしているようだ。
買い物をしているのは大半が主婦らしい女性で、歩いていく干場に何人かが遠慮のない視線を向けた。干場は素知らぬ顔で歩きつづけた。さすがに見ない顔だからといって、話しかけてくるほどの田舎ではないようだ。
やがて右手に「しんこう海水浴場」という看板が見えてきた。その先に、くすんだコンクリートの建物が何棟かあって、ひときわ大きい八階建ての屋上に「山岬観光ホテル」の看板が掲げられている。他は「旅館みなと荘」とか「年間民宿　岬」といった、小規模な宿泊施設ばかりだ。
「山岬観光ホテル」の正面玄関には、「リニューアルオープン、屋上露天風呂新設」のたれ幕がかかっている。
ホテル、民宿街を過ぎると、あたりはふつうの住宅が多くなった。古い建物は少なく、せいぜいこの三十年かそこらのあいだに建った家ばかりだ。
住宅街を過ぎると、道が直線になった。その半ばあたりから、右手に港湾施設が見えてきた。妙に洒落た、白塗りのクラブハウスらしき建物が中央にあり、その左右からまっすぐ海に向かって桟橋がのびている。
桟橋には、数隻のプレジャーボートが係留されていた。干場は立ちどまって、フェンスごしにマリーナのようすを観察した。
プレジャーボートのマストにカモメが並んでとまり、頭上を旋回するトンビがのどかな鳴き声を降らせている。
「山岬マリーナ、関係者以外の立入はご遠慮下さい」、フェンスには小さな看板がかかっていた。
クラブハウスの前は、芝生をしきつめた庭になっていて、ヤシの木が何本も植えられ、そこだけとりだせば、まるで南の島のような眺めだ。
だがマリーナ全体を見回しても、人けがまるでない。船の手入れをする者の姿もなく、係員らしい人間が動いているようすもなかった。少し先のフェンスの切れ目には、駐車場の入口があったが、奥に止まっている車は一台もない。広い駐車場の片隅に、

二台の自転車があるだけで、それがおそらく、今このマリーナにいる人間の数を表わしている。
　干場はしばらくフェンスの前にたたずんでいたが、やがてマリーナとは道をはさんだ反対側をふりかえった。
　マリーナの出入口から市道をよこぎるように一本道が内陸に向かってのびている。「マリンショップ新港」という店が手前にあり、その先に何軒かの飲食店があった。今はまだ開いていないが、飲み屋の入った雑居ビルもある。その一階には「ニュークラブ　人魚姫」という看板がでていた。
　干場はその方角に歩きだした。
「人魚姫」の前にスーツを着た男が二人いた。ホウキとチリトリを手に掃除している。不意にその手が止まって、直立不動になった。市道を走ってきたレクサスが止まったからだった。
　運転席をとびだした男が後部席のドアを開いた。シルバーグレイのスーツを着た、小柄で細身の男が降り立った。
「お疲れさまです」
　掃除をしていた男たちが声をそろえた。細身の男は小さく頷き、
「あれからきたか」
　と訊ねた。
「いえ、きてません。でも今日あたりくるのじゃないかと思います」
　男たちのひとりが答えた。緊張した声音だった。細身の男は薄笑いを浮かべた。
「何だ、お前、びびってるのか。あんな田舎やくざ、恐がることはねえ。つまんない嫌がらせしかけたら、ほうりだしゃいいんだよ」
「いいんですか。店長はおとなしくやれ、とおっしゃっていると聞きましたが」
「店を任されてるのは俺だ。俺が気にすんなっつったら、気にすんな。どうせサツに泣きついたって、あいつら地元とつるんでる。店のもの壊された頃にのこのこくるのが関の山だ。あてにはできねえぞ」
「わかりました」
「今日は俺も奥にずっといる。何かあったらすぐ知らせろ」

「はいっ」
　男は言葉を切り、あたりを見回して干場の姿に気づいた。潰れた「マリンカフェ」という店の軒先に立って、やりとりを眺めていたのだ。じっと干場を見つめる。干場はにっと笑った。
　男は一瞬目をみはった。
「見ない顔だな、あんた」
「観光客でね。ぶらぶらしてたらちょうどあんたらがいた」
　干場は答えた。男はまるで信じてなさそうな唸り声をたてた。
「観光客ぅ？　こんなさびれた町にかよ」
「海が好きでね」
　男はじっと干場の爪先から頭のてっぺんまでを見つめ、歩みよってきた。
「でかいな、あんた。身長、いくつだ」
「うん？　一八二センチ」
「体重は」
「八〇キロくらいかな」
「何かスポーツをやってたか」
「学生時代はアメフト。卒業してからはプロレス」
「プロレス?!　レスラーなのか」
　干場は肩をすくめた。
「引退した。チビで使えないといわれてな」
　男は目をむいた。
「あんたがチビって、どういうことだ」
「アメリカにいたんだ。アメリカのプロレスはいろいろあってね。悪役ならいいっていわれたんだが、悪役は性にあわなくってさ」
　干場はすらすらと答えた。
「アメリカにね、ふーん。今、仕事は何をしてる」
　干場は首をふった。
「無職だ。日本も久しぶりだから、ぶらぶらしようと思ってね」
　男は目を細めた。
「それでこの町にきたってのか」
「死んじまったお袋がこのへんの出なんだ。俺はくるのは初めてだが」
「しばらくいるつもりか」
　干場は顎をなでた。

「まあな」
　男は上着の内ポケットから名刺をとりだした。
「よかったらうちで働かないか」
　干場は受けとり、男の背後に立つ黒服の男たちを見やった。
「飲み屋のボーイか」
「他にもいろいろやってる。名刺を見ろ」
　干場は名刺に目を落とした。
「㈱トランスリゾート　専務取締役　柳明雄」とある。
「専務さんか」
「いっておくが、うちの商売はここだけじゃない。ホテルや水族館も経営してる」
「へー」
　感心したように干場はいった。
「もともとはこっちの会社じゃない。山岬を再開発するために乗りこんできたんだ。だから現地の人間はひとりもいない。あんたが入れば、初の現地採用って奴だ」
「なるほど」
「名前、何ていうんだ」
「干場。干場功一」
　柳はわずかに眉をひそめた。
「どっかで聞いたような名だな」
「俺は柳さんて知り合いはいない」
　柳は再び目を細め、干場の顔を見つめた。干場は平然とそれを見返した。
「まあいい。気が向いたら、夜でも店に遊びにきてくれ。一杯くらいご馳走する」
　大物ぶった口調で柳がいうと、干場はにっこり笑った。
「そいつはありがたいな。酒には目がないんだ」
「その体じゃ、相当いけるだろう」
「自分じゃわからない。いつもとことん酔っぱらう前に持ち金のほうがなくなっちまうんでね」
　柳はにやりと笑って、干場の胸を突いた。
「いいね。気にいった」
　踵を返し、「人魚姫」の入口に立つ。やりとりをぽかんと眺めていたボーイがあわてて扉を開いた。柳はふりかえりもせず、店の中に入っていった。

「おい」
　声に干場は首を回した。柳を乗せてきたレクサスの運転手だった。ずんぐりとした体つきで髪を短く刈り、アゴヒゲともみあげをのばしている。一見とろんとした目つきだが、妙に剣呑な光があった。
「遊びにくんのはいいが、専務になれなれしい口をきくんじゃねえ」
　干場の目をにらみ、運転手はいった。
「あんたは」
　干場は訊ねた。
「お前の知ったことじゃねえよ。いいか、礼儀正しくしねえと、痛い目にあわせるぞ」
　干場は男を見返し、小さく頷いた。
「わかったよ。あんたは柳さんを尊敬しているんだな」
「この野郎……」
　運転手はつぶやき、干場に歩みよった。
「なめたこといってんじゃねえぞ」
　手を干場にのばそうとしたとき、「人魚姫」の扉が開き、柳が顔をのぞかせて怒鳴った。
「桑野、何やってる。早くこい！」
　運転手はさっと向きなおると、
「はいっ」
　と返事をした。小走りで店内に消える。
　干場はこちらを見ていたボーイ二人に目を向けた。二人ともあわてて視線をそらし、掃除の仕事に戻る。
　それを眺め、干場は再び歩きだした。

3

ＪＲ山岬駅の北側と県道を結ぶ、長さ百メートルほどの道の左右に、何軒かの食堂や酒場が並んでいる。酒場は大半が、間口が扉の幅しかないような細長い造りで、奥に向かって四、五人ぶんのカウンターしかない。

夕方になると、潰れていない店の大半が扉を開けはなち、道いく者の目にも中のようすが見てとれた。カウンターの中、あるいは外に、たいていひとりかふたりの従業員がいて、テレビがついている。従業員は、五十代の女性が多く、バーテンダーのいでたちをした男がひとりの店もある。

県道の向こうには、コンクリート製のがっしりとした建物が二棟あった。手前になるのが市役所で、その先のひと回り小さいが見た目はよく似た建物が警察署だ。

警察署の前にはパトカーが二台止まっていて、出入口のひさしの下に、制服の警官がひとり立っている。

警察署の玄関をくぐって、五十代後半の男が現われたのは、午後六時まであと十分ほどの時刻だった。あたりが薄暗くなり、建物正面にとりつけられた赤いランプが光を強めている。

制服警官が軽く敬礼をした。男はうん、と頷き、

「ご苦労さん」

とつぶやいて、警察署をあとにした。髪の大半が白く、それをオールバックになでつけている。体つきは大きくなく、それでなくとも背を丸めて歩くので、身に着けたくたびれたスーツともあいまって、退職まぢかの老教師のようだ。

白髪頭の男はとぼとぼと警察署の駐車場をよこぎり、県道にでた。

暗くなり、県道は交通量がぐっと減っている。もともとが漁師町のせいもあり、山岬市は朝と夜が早い。午後八時を過ぎると、岬町地区は、ほとんど人も車も見かけなくなってしまう。

そのかわり、夏なら午前四時前には、漁船が港をでていく。六時には、漁港と周辺は活気づいている。

警察署と市役所の中間に信号があり、男は県道を渡った。あたりに信号はあとひとつしかなく、二百メートルほど東の市民病院前だ。そのせいで、夜間県道を走る車はひどくスピードをだしている。年に何回かは交通事故が起こり、そうなると死んだり大怪我をする者が必ずいた。

駅につづく道に入った男は、右手の「ＢＡＲ」と看板が掲げられた建物に歩みよった。「ＢＡＲ」の下に、小さく「伊東」と書かれている。開いた戸口から、白いシャツに蝶ネクタイを締めたバーテンダーの姿が見えた。男と同じ年くらいで、壁にとりつけたテレビに見入っている。

「お帰り」

バーテンダーは、男が入口をくぐると、テレビから目をそらさず、いった。

「ああ、ただいま」

男は答え、四つしかないストゥールの一番手前に、よっこらしょとつぶやきながら尻をのせた。

バーテンダーはテレビを見ながら、背の高いグラスに氷を数個入れ、国産のウイスキーを垂らした。つづいて背後の冷蔵庫から炭酸水の壜（びん）をとりだすと勢いよくグラスに注ぐ。マドラーで軽く混ぜ、安物の合板のカウンターにおいた。カウンターはそこらじゅうに煙草による焦げ跡があった。

「ありがとよ」

男はいってハイボールのグラスをひきよせた。なみなみと注がれた酒をこぼさないように、手よりも口を先にもっていき、すする。

「うん、うまい」

もちあげてもこぼれないほどグラスの中身が減ると、男は今度はひと息で半分を空けた。

「好きだねえ」

それを横目で見て、バーテンダーがいった。

「安（やす）さんは、ハイボールひと筋だ」

「そう。あたしゃぶきっちょでね。何かひとつ覚えるとそればっかりさ。飯も同じオカズばっかり食うと、死んだ女房にもあきれられた」

安さんと呼ばれた男は、わずかにかすれた声でい

った。スーツのポケットからショートピースの箱をとりだす。
「そういや、もうじき七回忌だな」
バーテンがつぶやいた。
「早いねえ。娘さんは帰ってくるのかい？」
「どうかね。子供が三人もいて、手のかかる盛りだからな。旦那も仕事が忙しいらしいし。難しいのじゃないかね」
男はとりだしたショートピースをとんとんとカウンターに打ちつけ、答えた。
「まあ、しょうがない。去る者は日々に疎し、だ。イカ、煮たの、食うかい」
「ちょこっともらうかね」
バーテンダーはカウンターの下から、ワタごと甘辛く大根と煮つけたスルメイカをとりだした。小鉢に盛り、割り箸といっしょにカウンターにおく。男はちょびちょびとそれをつまみ、ハイボールをおかわりした。
店の前の道を、ときおり人と車がいき過ぎた。営業している店で一番客が入っているのは、「中華、焼肉。レストラン岬館」の看板を掲げた、二階建ての食堂だった。
バーテンダーはあいかわらずテレビを眺め、男は酒をなめながら表の通りに目を向けている。
「お」
男が小さく唸った。型の古いメルセデスが通りに入ってきたからだ。メルセデスは、バーの斜め向かいで止まり、四人の男が降り立った。
バーテンダーはそれをちらりと見やり、
「何だ、また組の連中か」
とつぶやいた。
「何しにきたんだい」
男が訊ねる。
「向かいに潰れたスナックが二軒あるだろ。その左隣、『ハルミ』に立ち退き交渉してんのさ。三軒ぶん使って、新しい店を始める気らしい。ほら、新港町の『人魚姫』とかいうのがけっこうはやってるんで、同じような店をやろうって腹なんだ」
「『ハルミ』の婆さんは売る気なのか」
「いや、無理だろう。だって二階で暮らしているんだから。追い出されたら、いくとこがない」
「反対側は、駄目か」
「右っかわかい？『令子』は客が入っているからな。第一、組長がママにのぼせてる。立ち退きなんかさせっこない。それどころか、その新しくやろうとしてる店のママにならないかって口説いたらしいよ」
「ほう」
「ぴしゃりと断わったって話だ。まあ、そうだろう。落ち目のやくざ者に今さら囲われるくらいなら、田舎に帰ってきやしない」
「それもそうか」
メルセデスを降りたのは、典型的なやくざ者が三人と、スーツを着た角刈りの男だった。やくざ者はいずれもパンチパーマをかけたり、額に剃りこみを入れたチンピラ風で、都会ではめっきり見かけなくなったタイプだ。
角刈りの男はメルセデスのかたわらに立ち、あたりを見渡した。バーの中にいる男には気づいていない。
やくざ者三人は、車のすぐ前の店「ハルミ」の扉を押した。
「やれやれ」
男はつぶやいた。
「困ったもんだね」
「暴れたりしなけりゃいいのだけどね。今のところそんなようすはなくて、説得しているらしいよ。ただまあ、あんまり知恵の回る連中じゃないからね。婆さんが頑固だと、何かしでかすかもしれない」
バーテンダーはさして気にもしていない口調でいった。
「ま、ひどい嫌がらせされたら、一一〇番すりゃいいのだから。だろう、安さん」
男は無言で首をふった。むっつりとした表情になり、ハイボールをすする。
アロハシャツを着た大柄な男が通りに現われたのは、それから五分後くらいのことだった。
「何だありゃ」
男がつぶやいたので、バーテンダーが首をのばした。アロハの大男は、通りの中央にたたずみ、途方に暮れたようにあたりを見回している。

「見ない顔だ。漁師にしちゃ色が白い」
「船、入ってたっけ？」
男が訊くとバーテンダーは首をふった。
「カツオ追っかけてる船がくるのは、まだ先だよ。港には、よその船は入ってない」
「じゃあ旅行者か」
「だろうね。でもひとりでこんなところにくるかね」
二人が話しあっていると、大男が、メルセデスのかたらわに立つ、角刈りスーツに歩みよった。
「ちょっと訊きたいんだ―」
角刈りスーツはうさんくさげに大男を見やった。
「何、おたく」
「いや、飲み屋を捜してるんだけど」
「このへん、みんなそうだよ。ぼったくりはないから安心しな」
角刈りスーツはいった。
「そうじゃなくて、あの、干場の殿さまって人の家で働いてた女の人がいる店がこのあたりにあるって聞いて」
角刈りスーツの男の表情がかわった。
「なんでそんなとこ捜してるの」
「昔の知り合いの話を聞こうと思っているんだけど」
「ふーん」
角刈りスーツはじろじろと大男を見つめた。
「おたく、旅行者？」
「まあ、そんなような者だね」
「名前は？」
大男はぽかん、とした。角刈りスーツはあたりを気にするように目を配り、上着から警察バッジをとりだして見せた。
「別に、悪いことしようと思ってないよ」
大男がいったが、角刈りスーツはそれをさえぎった。
「いいから名前は？　できたら免許証とか、身分を証明できるもの、見せてもらえるかな」
大男はあきれたように、角刈りスーツを見つめた。
「なんで、道訊いただけで、身分証見せなきゃいけないの」

「別に悪いこと何もしていないなら、見せられるだろう」
角刈りスーツの言葉づかいがかわった。
「変な町だな、ここは」
大男がつぶやいた。
「何が変なんだ」
「昼間は駅前で女の子に道を訊いたら、パンツ見たから金払えっていわれて。夜は夜で、身分証だせ、ときた。〝よそものをいじめる週間〟てやつかい」
「はあ？　何いってんだ」
カウンターでやりとりを見ていた男は立ちあがった。バーの戸口によりかかっていった。
「あんたの捜しとる店は、そこの『令子』だ」
大男と角刈りスーツがふりかえった。
「安さん！」
角刈りスーツがぎょっとしたようにいった。それを無視し、男は大男に告げた。
「『令子』のママの母親が、その干場さんの家でお手伝いをしとったんだ」
「ふーん。で、あんたは？」
大男はいった。
「そのガラの悪い刑事さんの知り合いだ」
男がいうと、角刈りスーツは、バツの悪そうな表情になった。
「へー」
大男は、バーの戸口に立つ男と角刈りスーツの顔を見比べた。
「じゃ、あんたも刑事さんかい」
「もうじき停年の老いぼれだ。そっちの現役ばりばりとはわけがちがう。酒を飲むくらいしか楽しみがなくてね。よかったら、あんたもどうだ、一杯。このマスターが作るハイボールはいけるよ」
大男は相好を崩した。笑うと、愛敬のある顔になる。
「奢ってくれるのかい」
男は肩をすくめた。
「安月給だからな、一杯だけだぞ」
安月給というとき、視線を角刈りスーツに向けた。角刈りスーツは嫌な顔をした。
「目崎、お前も飲むか」

男がいうと、角刈りスーツは首をふった。
「いや、まだ仕事があるんで、やめておきます」
「そうか。仕事か」
男はいって角刈りスーツをじっと見つめた。やがて角刈りスーツはいたたまれなくなったように、息を吐いた。
「じゃ、俺はこれで」
「ああ、ご苦労さん」
角刈りスーツが歩いて県道の方角に去るのを、男は見送った。
大男がのっそりとカウンターに腰かけても、まだ見ている。
「そういや、奢ってやる、といわれたのも二度目だ」
嬉しそうに大男がいったので、ようやくふりかえり、隣に腰をおろした。
「喧嘩を売られたのが二度、奢ってやるといわれたのも二度、か」
男はつぶやいた。
「そうそう。そんなに悪い街じゃない気がしてきた」
バーテンダーがおいたハイボールのグラスをつかみ、大男はいった。男は自分のグラスを掲げた。
「よろしくな。私は安河内（やすこうち）」
「干場功一」
安河内は干場の顔を見た。
「殿さまと関係があるのか」
「それがわからないんだ。同じことを、パンツ見せた女子高生に訊かれた」
「イクミだな、それは」
「知ってるのかい」
「イクミの母親と『令子』のママは姉妹だ。二人のおっ母さんは、若い頃離婚して、娘二人を連れてこっちへ戻ってきたんだ。出戻りにできる仕事がなかったんで、独り身の殿さまの身の回りの世話を焼くことになった。もう三十年以上前の話だよな」
安河内はバーテンダーにあいづちを求めた。
「そうさね。令子がまだお腹の中にいるときに、大ママは戻ってきたからな」
バーテンダーは指を折って数えた。

「令子が今、三十三か四だから、帰ってきてから二十年以上、殿さまのところにおったな」
「その殿さまはいつ死んだ？」
干場は訊ねた。
「六年前だ。変わり者でな、生涯、独り者で通した。生きとったら八十か。両親に早く死なれて、確か三十五かそこらで干場家の当主になったんだ」
「そんなたいそうな家なのか」
「まあ、このあたりの大地主でな。今は住宅地になっとる新港町の大半は、干場家の土地だった。それが亡くなるときに、全財産を市に寄付するって遺言状を残したんで、全部、山岬市のものになった」
「はあん」
干場はたいして興味がないように頷いた。
「もしあんたが干場家ゆかりの人間、ということにでもなったら、ひと波乱あるかもしれん」
「なんでだい。その干場家の財産は全部、市のものになっちまったのだろう」
「『相続回復請求権』という法律用語がある。平たくいえば、知らないうちに自分が相続できる財産が人のものになっちまっていても、訴えを起こせば、とり返せるって権利だ」
「ふーん」
「うろ覚えだが、確か自分に相続する権利があるとわかって五年以内か、相続の開始から二十年以内であれば有効だったような気がするな。殿さまが亡くなって六年だから、まだまだ、有効だ。もちろん、あんたが殿さまゆかりの人物だという場合に限ってだが」
安河内はいって、じっと干場を見つめた。
「俺にはわかんねえよ。お袋がそういっていただけだから」
干場は首をふった。
「お袋さんはどこにいる？」
「もう十五年前に死んだよ。若いときにアメリカに留学して、知りあった親父とのあいだに俺ができて、それが理由で勘当されたらしい。お袋もけっこう気が強かったから、上等だってんで、それっきり田舎には帰らなかったんだと」
「親父さんは何をしておったんだ」

「ジャズミュージシャン。ドラム叩きだった。日本じゃ食えなくてアメリカに渡り、ニューヨークのブルックリンにいたときにお袋と知りあった。お袋が死んだあとは、俺は親父の横浜の親戚に預けられて育ったんだ。親父の名前は加藤っていうから、てっきり加藤功一だと自分のことを思ってたんだけど、アメリカの大学にいくときに向こうの戸籍を調べたら、ああらびっくり、俺とお袋は親父とは別の戸籍になっていて、コウイチ・ホシバだったわけ。どうもお袋とくっついたとき、親父は結婚してたアメリカ人の女房がいて、別れるにもとうてい慰謝料が払えねえって状況だったらしい」

「なるほど」

「まあ、アメリカにいるときは、加藤だろうが干場だろうがどっちでもよかったんだけど、向こうの三流大学卒業してうろうろしているうちに親父も死んじまってさ。気がつけば俺も三十だし、そろそろ落ちつこうかな、と思ったんだ。それで日本に戻ってきて、お袋の田舎ってどんなところだろうと思って訪ねてきたんだ」

安河内はあきれたように首をふった。

「じゃ、あんたは今、無職か」

「そう。ここで仕事が見つかったら、それも悪くないかな、と。海があっていいところじゃない」

明るく干場はいって、空になったグラスをふった。安河内はバーテンダーを見やった。

「そういや、殿さまには年の離れた妹がいた、と聞いたことがある。先代が妾に生ませた娘で、殿さまとは三十近く年が離れていた。外聞が悪いんで、先代はずっと東京の学校にいかせてたって話だったな。殿さまの代になっても戻ってくるようすがないんで、もう縁が切れたものだと皆、思ってた」

「名前は、その妹の」

安河内が訊ねると、バーテンダーは首をふった。

「覚えてない。もしかすると聞いてもいないかもしれない。まあ、おおっぴらには話せない、身内の事情だからね」

安河内は干場に目を向けた。

「あんたのおっ母さんがもし、その先代の娘だったとしたら、あんたは干場家の財産を相続する権利がある、唯一の人間、ということになるぞ」

「そりゃすごいや。でも、もしそうならって話だろ。干場って名前は確かに多くはないけど、日本中で一軒だけってわけでもない」

「だがこの町には一軒だけだ」

安河内の顔が妙に深刻だった。

「ここって聞いたわけじゃない。このあたりってだけで」

バーテンダーが口を開いた。

「山岬の大地主ってのは二軒あったんだ。一軒が、昔の網元で、今は弁護士の勝見先生の家。もう一軒が、干場家。干場っていうのは、大昔、その土地で網や獲ってきた魚を干してたから、ついたって話だ。勝見先生なら何か知っているかもしれん」

安河内が首をふった。

「勝見さんのところに訪ねていくのはよしたほうがいい」

「なんで？」

干場は訊ねた。バーテンダーは安河内の顔を見つめ、小さく、

「そうだな」

とつぶやいた。

「なんだい、駄目なのかい」

「この小さな町にもいろいろ事情がある。いきなり現われたあんたみたいのがうろついて、突っ突き回したら、さっきもいったようにひと波乱起きてしまう。私はね、静かに停年を迎えたいんだ」

安河内はむっつりといった。

「なんだよ、さっきは、俺が唯一の相続人だとか何とかいって、たきつけたくせに」

干場はあきれたようにいった。

そのとき、通りの向かいから金切り声が聞こえた。

「でていけ！　でていっとくれ！」

年配の女の声だった。三人は外をふりかえった。

「ハルミ」の扉が開き、やくざ者が姿を現わした。

「この婆あ、いい加減にしろよ。人が下手にでりゃつけあがりやがって」

ひとりが唸っている。

「何いってんだよ。何があったってここは金輪際、売らないからね。欲しけりゃ、あたしを殺してもっ

ておいき！」
「おう、だったら今すぐぶっ殺してやろうか、婆あ！」
「にぎやかだね」
干場は驚いたようすもなくいった。安河内は重い息を吐き、首をふった。
「でてけっ」
ばしゃっという音がした。
「あっ、何しやがる⁉　高えんだぞ、このジャケット」
「この野郎」
「安さん」
バーテンダーがうながした。安河内はもう一度ため息を吐き、立ちあがった。
「ハルミ」の戸口に水さしをもった六十代の女が立ちはだかり、それを三人のやくざ者がとり囲んでいる。バー「伊東」をでた安河内が背後から声をかけた。
「お前ら、たいがいにしておけよ」
ぎょっとしたようにやくざたちはふりかえった。
「あっ」
「や、安さん……」
「あれっ、目崎の旦那は？」
三人が口ぐちにいった。
「目崎なら、仕事があるとかで署に戻った」
ひとりが舌打ちした。それを見やり、安河内はいった。
「人がせっかく仕事のあとの一杯を楽しんどるのに、それをまずくするような騒ぎを起こすんじゃない」
「すんません」
やくざたちは顔を見合わせた。
「とっとと帰れ。それ以上騒ぎを起こすと、私も仕事にするぞ」
安河内は止められたメルセデスに顎をしゃくった。
三人はふてくされたようにそっぽを向き、唾を吐いたり、舌打ちをする。安河内はそれをとがめるでもなく、ただ静かに見つめた。
「わかりましたよ！」
やがて兄貴分らしいひとりが吐きだした。
「今日のとこはひきあげます」

「二度とくるんじゃないよ！」
女が叫び声をたてた。
「覚えとけよ、婆あ」
ジャケットの前を濡らしたチンピラがメルセデスの運転席のドアを開けながらすごんだ。
「ふんだ。あいにく年のせいか、物忘れがひどくてね。覚えてなんかいられないね」
女がいい返す。安河内は苦笑いを浮かべた。
やくざ者を乗せたメルセデスは、盛大にエンジンを吹かし、タイヤを鳴らして走り去った。
「ハルミ」の戸口に立った女とバー「伊東」の戸口に立った安河内は顔を見合わせた。
「何もされなかったかね」
「お礼なんかいわないよ！」
女はいって、店に入り、ぴしゃりと扉を閉じた。
それを眺めていたバーテンダーがぷっと噴きだした。
安河内は、はあっと情けない声をたてた。
「だから嫌だったんだよ」
カウンターに戻ると、愚痴るようにいった。
「しようがないよ、安さん。さんざんただ酒にありついたあげく、袖にしたのだから」
「そんな気はなかったんだよ」
「あんたはそうでも、向こうはその気になる。なにせ、やもめ男が通ってくるんだ。いくらうば桜でも悪い気はしないってものさ」
干場はやりとりに耳を傾けていたが、不意に立ちあがった。
「ご馳走さま。俺はそろそろいきますよ」
「あ、ああ……」
思いだしたように安河内は干場を見た。
「いくかね。そうか」
「もうひとり、奢ってくれるっていってた人もいますし、向かいの店ものぞきたい」
干場は屈託のない口調でいった。
「あんた、しばらくこの町にいるのかい」
バーテンダーが訊ねた。
「ええ。とりあえず。『みなと荘』って旅館に部屋がとれたんで」
「あそこね。古いけど、まあまあ清潔だ。飯はつい

てるのかね」
「朝は、いえば食わしてくれるそうです。夜は、まあ適当に食えるでしょう」
「たいしたもんはないが、うちでも何かしらはだせる」
バーテンダーがいったので、安河内は目を丸くした。
「もしかして大金持になるかもしれない人に、恩を売っといて、損はない」
バーテンダーはすました顔でいった。
干場は頷いた。
「そのときは世話になります。それじゃ、安さん、失礼します」
店をでていった。安河内は憮然とした顔で見送った。バーテンダーが、ふっふっふと含み笑いをしている。
「何がおかしいんだ」
「おもしろいじゃないか」
「安さんなんて気やすく呼びやがって」
安河内はハイボールの残りをあおった。
「チンピラに呼ばせてるんだから、あの若いのに呼ばれたって、腹を立てることもなかろう」
バーテンダーは空になったグラスにウイスキーと炭酸を足した。
「あいつらはいってみりゃ、お得意さんだ。ワッパをかけたこともある。でも、あの若いのをお得意さんにする気はない」
苦い口調で安河内はいった。
「別にそんな心配はいらんだろう。見たところ、まともそうだ」
「本人が問題なのじゃない」
安河内はハイボールをなめ、つぶやいた。
「奴さんがいった通りの出自だったら、この町は大騒ぎになる。ずっと日陰におかれてたでかい石をどけるようなものだ。トカゲやらムカデがぞろぞろでてくるぞ」
バーテンダーは安河内を見つめた。
「面倒な仕事を増やされちゃかなわん」
バーテンダーがにやりと笑った。
「その面倒な仕事を、けっこう気に入っているのじゃないかい、安さんは」

4

バー「伊東」をでた干場は、向かいのスナック「令子」の前で足を止めた。扉をしばらく見つめていたが、結局押さずに歩きだした。
山岬駅の反対側は、昼間、イクミとシンゴにからまれたロータリーだった。夕刻ということもあって、干場が降り立ったときよりは、多くの人がいきしている。
駅を背にして右手、岬町にのびる道はくねくねとまがっていた。漁師町らしい入りくんだ路地が迷路のように連なっていて、軽トラックが路肩ぎりぎりに止まっている。
夜の早い漁師町とはいえ、さすがにまだ眠りにはついておらず、古い家並みを縫うように歩くと、夕餉の仕度と思しい煮炊きの匂いやテレビの青い光、それに小さな子供の声が鼻や目、耳に流れこんだ。
路地の角には古びた電灯が立ち、黄色い光を投げかけている。
やがて湿りけを含んだ風が、正面から吹きつけてきた。道は直線になりゆるやかに下っている。正面は海で、漁港の敷地が広がっていた。
干場はまっすぐに歩いていった。
漁港は船揚げ場と隣接するコンクリート製の建物、海に向かってつきでた二本の堤防から成っている。潮の香りと鮮魚の匂いが強くなった。
堤防は、海に向かって右側の方が幅もあり長さもあった。車二台がいきできるだけのコンクリート製の堤が三十メートルほど海に向かってつきで、その先が直角に折れてさらに十メートルほどある。先端に青い光を点す小さな灯台が立っていた。
堤防の内側には、せいぜい全長が七、八メートルしかないような漁船が何艘も係留され、わずかな波に揺れていた。ぎいっ、ぎいっという船体やロープの軋みが黒い海面を伝っている。
反対側は、直線の二十メートルほどの堤防で、先端に赤い灯台が立ち、その内側にも小さな漁船が並

んで係留されている。
　堤防と堤防のあいだは百メートルほどで、スロープのついた船揚げ場が端にあり、中央は屋根の高い建物だった。漁業組合の施設のようだ。
　漁港の内側は、十メートルほどの間隔をおいて水銀灯が立っている。バケツをかたわらにおいた釣り人が数人、その水銀灯の下に散らばっていた。
　干場はそのうちのひとりに歩みよっていった。釣り人は、自転車や軽自動車でやってくるらしく、かたわらに乗り物を止めている。
　海面に、小さな赤い光が浮かんでいた。釣り人の手にした竿と糸で結ばれているようだ。
　眺めていると、その赤い光がすっとにじんだ。釣り人が竿をもちあげる。竿先が丸くおじぎをし、ぶるぶると震えた。やがてこらえきれなくなったように、赤い光が水面を割って浮上し、さらにその下に銀色に輝くものがつづいた。
　赤い光は電池を内蔵したウキで、銀色に輝いていたのは魚だった。
　釣り人は五十代のどこかと思われる男で、干場から見ると、ジャンパーに長袖、長ズボン、さらにゴム長という冬のようないでたちをしていた。
　男は慣れた仕草で魚を手もとに寄せ、外して、椅子がわりにすわっていた小さなクーラーボックスの中に落としこんだ。さらにエサと思しい小さなエビを糸の先のハリにつけ、海にふりこむ。一連の動作に無駄はなく、ふりこんだあと足もとにおいたタオルで指先をぬぐうところまでが流れの中でおこなわれた。
「その魚、何です」
　干場が訊ねると、釣り人はふりかえりもせず、
「アジだ」
　とだけ答えた。
「へえ、アジが釣れるんだ」
「この時期は小せえな。もうひと月もすっと、大きくなる」
　海面に浮かんだウキの赤い光から目をそらさず、釣り人は答えた。
「漁師なんですか」
「はあ？」

　釣り人はあきれたようにいって干場をふりかえり、その大きさに一瞬たじろいだ。
「漁師じゃないよ。漁師はこんなみみっちい釣りはしない。アジなんて網にかけてどさっとあげる」
「そうなんだ」
「こりゃ趣味。まあ、時間潰しみたいなもんだね」
「そりゃ失礼。あんまり手慣れてるんで、てっきりプロかと思って」
　釣り人は苦笑した。
「まあ、真冬をのぞけば、ほとんど毎晩ここで竿をだしているからな」
「毎日釣れるんですか」
「釣れない日もある。今日は駄目なほうかな。いい日なら、一晩で百匹くらい釣れる」
「百匹！」
「小さいよ、そういうのは。もって帰っても猫のエサだ」
「へえ。でも飯のオカズには困らないですね」
「毎日食うのは干物くらいだね。あとは冷凍しておいて、適当に焼いたり、揚げたり」
「アジ以外の魚も釣れるんですか」
「夜はあまり釣れないね。まあ大きいのがきても、仕掛けが細いんで切られちまう。アジってのは目がいいから、夜の暗いときに細い糸で狙うんだ」
「なるほど。沖のほうには他の魚もいるんですか」
「そりゃいるよ。タイやヒラメも釣れるし、カツオだ、イカだと漁師はとってくる。この港の中じゃ、せいぜいアジくらいだけど」
「ふーん。いいとこなんですね」
「釣りが好きならな。ま、海しかないんだ。釣りくらいしかすることがない」
　釣り人はいった。
　干場はしばらくそこに立ち、釣り人といっしょになってウキを眺めていた。が、十分ほどしてもウキは沈まない。それでも釣り人はじっと動かず、竿を手にしている。
「どうも」
　干場は小さくつぶやき、踵を返した。港を離れ、漁協の建物を回りこむようにして、きた道とは反対側にでた。

漁港の外側で街灯以外に光を放っているのは、飲物の自動販売機だけだった。店舗は一軒もない。
干場が駅から歩いてきたのはどうやら古い道だったようだ。漁港の外に立つと、比較的広い、片側一車線の道が東の方角にのびているのがわかった。
干場はその道路に沿って歩いていった。何となく昼間歩いた市道につながっているような気がしていたのだ。
その予感はあたった。三十分ほど歩くと、前方に見覚えのある水族館の建物が見えてくる。もう少し先が、駅からつながった市道との交差点のようだ。
干場は足を止めた。ついさっき見た、古い型のメルセデスが路上に止まっていたからだ。かたわらに二階建ての建物があり、ガラス窓に「岬組」という金文字が入っている。スナック「ハルミ」を威(おど)していたやくざ者の所属する組事務所のようだ。
建物の前には、メルセデス以外にも数台の車が止まっていた。窓のすべてに明りが点っているが、さすがに中の物音までは聞こえてこない。
キイイッという自転車のブレーキ音がすぐかたわらで響き、干場はふり返った。
「おっさん、じゃなかった干場さん」
自転車を止めた細い影がいった。シンゴだった。制服ではなく、ジーンズにだぶっぷりしたTシャツを着ている。
「よう」
干場は頷き、白い歯を見せた。
「何してんすか」
「うん？　散歩してた」
「えっ、あれからずっと!?」
シンゴは大声をだした。
「まあな。お前は何してんだ」
「母ちゃんに頼まれて、届けもんした帰りっす」
「なんだ、家の手伝いもするのか。立派な青少年だな」
「母ちゃん、目が悪くて、夜はあんまりでかけらんないっすよ。親父が観光ホテルで働いてるんで、弁当届けろっていわれて」
「そうか。偉いな」
「勘弁して下さいよ。干場さん、組の人に何か用すか。だったら紹介しますよ」
「別に用なんかない。ここがお前のいっていた組か」
シンゴは頷いた。
「お前んち、どこなんだ」
「うちはあっちです」
シンゴがさしたのは、今干場が歩いてきた漁師町の方角だった。
「じゃ、帰るとこか」
「このまま帰ってもつまんないんで、ゲーセンでもいこうかな、と」
「ゲーセン？」
「水族館にくっついてあるんすよ。けっこう地元の連中がたまってて」
「そこでカツアゲでもやるのか」
「地元の連中にはやんないっすよ。ハブにされちゃいますから」
「ハブ？」
「仲間外れのことっす」
ガラガラッとガラス戸の開く音がした。岬組の事務所から、三人ほど若い男たちがでてきたのだ。ひとりはスナック「ハルミ」を威しにきたメンバーだ。
「お疲れさまっす」
「お疲れさまでしたぁ」
事務所の内部に口々に声をかけ、頭を下げている。
向きなおったひとりがシンゴに気づいた。
「おう、お前何やってんだよ」
事務所内に向けた腰の低さとはうってかわり、横柄な口調になっていった。年齢は二十四、五だろう。妙に色が白くぶよぶよと太っている。
「あ、お疲れさまでした。今ちょっと使いにいった帰りっす」
「使いだぁ？　お前、誰かのパシリやってんのか」
太ったチンピラは干場を無視して、シンゴに歩みよった。
「そんなことないっす。親父に弁当届けただけで」
「ちっ」
チンピラは唾を吐いた。
「お前の親父、確か観光ホテルだよな」
「そうです」

「気に入らねえな」
いきなりチンピラはシンゴのTシャツの襟をつかんだ。
「観光ホテルって、お前、どこがやってっか、わかってんのかよ」
「えっ」
「一回、潰れたのを、どこが買いとったか知ってるかっつってんだよ」
チンピラはいって、シンゴの襟をつかみ、揺さぶった。シンゴはぶるぶると首をふった。
「いえ、わかんないっす。親父は潰れる前から観光ホテルつとめてましたから」
「馬鹿野郎！」
チンピラはシンゴをつき倒した。
「おーい、何やってんだ」
いっしょに事務所をでてきて車に乗りこもうとしていたあと二人のうちのひとりが声をかけた。
「いくぞ、松本」
「ちょっと待てよ。こいつ気に入らねえからよ」
松本はいった。仲間二人はあきれたように首をふる。
「また、お前。そんなガキ、ほっとけよ」
「いや。こいつの親父、観光ホテルで働いてるんだ」
「働いてるったって、掃除とか、風呂焚きとか、そういう仕事っすよ」
シンゴがいった。
「うるせえ」
松本と呼ばれたチンピラはシンゴの頬を張った。仲間が舌打ちする。
「病気だぞ、あれ」
「トルエン吸いすぎなんだよ」
どうやら松本は、岬組の中でも凶暴で通っているらしい。
「キレるとあいつ、わけわかんなくなるからな」
「ほっといていくぞ」
二人は車に乗りこみ、走り去った。あまり組うちでも好かれていないようだ。
当の松本は、それがこたえたようすもなく、シンゴにおおいかぶさった。

「いいか、この野郎。観光ホテルを買収したのはよ、今、うちにケンカをしかけてる『トランスリゾート』って、カス会社なんだよ。お前の親父が観光ホテルで働いてるってことは、お前はその『トランスリゾート』に食わせてもらってるって意味なんだ。えっ、聞いてるのか、この野郎」
松本はぴしゃぴしゃとシンゴの頬をぶあつい手で叩く。
「そんなの知んなかったっすよ。勘弁して下さい」
「うるせえ。今日は俺、機嫌悪いんだ。誰かのこと、ぼこぼこにしなけりゃ気がすまねえ」
松本は大声をあげた。シンゴの顔が蒼白になった。
干場がぼそっといった。
「だからいったろう。青少年がやくざ者と仲よくしたっていいことなんかないって」
松本は初めて気づいたように干場を見た。
「はあ、何だ、お前」
「通りがかりの者だよ。昼間、シンゴと知りあったんだ。組に仲のいい人がいるって自慢してたが、あんたのことかな」
「仲のいい？　何、ワケのわかんねえこといってんだ、このガキ」
松本はシンゴの細い喉をワシづかみにして宙吊りにした。自転車が音を立てて倒れた。
「誰がお前みたいなガキと仲よくする。え？　いってみろ、こら」
シンゴはもがいた。
干場は助けるでもなく、そのようすを眺めている。松本が目を向けた。
「何見てんだ、こら」
「別に」
「別にじゃねえぞ、この野郎。文句あんのか」
「文句はないよ。あんたら友だちなのだろう、内輪もめに口をだす気はない。なあ、シンゴ」
もがいているシンゴに干場はいった。
「……がら」
「何？」
「ちがう、友だちじゃない」
とぎれとぎれにシンゴはいった。
「友だちじゃない？」

松本がようやくシンゴを離した。シンゴはその場にしゃがみこみ、ぜいぜいと息をした。
「友だちじゃないっすよ。俺によくしてくれるのは別の人っす」
シンゴは吐きだした。
「なんだ、そうか。このお兄さんもてっきり友だちだと俺は思ったぞ」
松本がいきなり干場の肩を突いた。
「ふざけたこといってんじゃねえぞ、この野郎。手前もぼこぼこにしてやろうか」
「うーん」
干場は唸った。
「何だ」
「あんたにはちょっと無理だな」
「なにい！」
松本が怒鳴った。その直後、背後の戸が開き、
「何を事務所の前で騒いでんだ、こら」
声が浴びせられた。
「あっ、頭山さん！」
松本が気をつけをした。坊主頭で、干場に勝るとも劣らない体格の男が岬組の事務所から現われた。うしろに四、五人のチンピラを従えている。
頭山と呼ばれた男は、立ったまま近づくでもなく、松本をにらんだ。
「うるせえんだ、がたがた。ちっとは考えろ、馬鹿！」
「すいません」
松本はちぢこまった。
「ただでさえ、近所の人間に目の敵にされてんだ。事務所の前で、でかい声なんかだすんじゃねえ」
「申しわけないっす」
頭山は鼻を鳴らし、控えているチンピラをふりかえった。
「おい、いくぞ」
「はい」
「はいっ」
威勢のいい返事をして、それぞれ車に乗りこむ。松本があわてて、頭山の乗りこむ車のドアを開けた。頭山が松本をにらみ、小言をいった。
「いこか」

干場はシンゴにいった。シンゴが弾かれたように立ちあがり、自転車を起こした。二人は、岬組の事務所の前を離れた。十メートルほど遠ざかったところで、三台の車が二人を追いこしていった。
シンゴはうつむき気味で、自転車を押している。
「傷ついたろう」
からかうように干場はいった。
「別に」
シンゴはとがった声をだす。
「そうか。じゃあいい。ゲーセン、いってこい」
干場がいうと訊ねた。
「干場さんはどうすんの」
「散歩のつづきかな。この町が気に入った。歩いてるだけで、次から次にいろんなことがある」
干場は白い歯を見せた。シンゴはあきれたように首をふった。
「変な人だな」
「まあな」
屈託のない口調で干場は答えた。
「でもさ、もしあのとき頭山さんがでてこなかったら、あの松本ときっとやる羽目になったよ。平気だった？」
「平気、とは？」
「怖くない？」
「なんであのデブが怖い」
「だって、組の人だよ。バックに組がついてんだよ」
「そうか、なるほどな。考えもしなかったな」
「この小っちゃな町でさ、組は岬組いっこしかないんだ。そこににらまれたら、生きていけない」
「ふーん」
干場は顎の先をかいた。
「あのデブが、もうひとついってたろう。『トランスリゾート』だっけ？」
「よくわかんないけど、やくざじゃないよ。だってホテルとか経営してるんだぜ。水族館をリニューアルして、ゲーセンくっつけたのもそこだし」
「ガラの悪いのはいないのか」
「あんまり見たことないよ。昔から、山岬じゃ、やくざといえば岬組だもの」

「あとからでてきた坊主頭が親分か」
シンゴは首をふった。
「あの人はナンバー2、若い者頭(がしら)の頭山さん」
「なかなか迫力あったな」
「あの人が一番ちゃんとしてるって噂」
「親分は」
「もういい年なんだけど、今イチみたい。漁がよくて、町が景気よかった頃はブイブイいわせてたって」
「そうなのか」
「イクミの叔母さんに惚れてて、店に通ってるらしいよ。そういや、いったの？　イクミの叔母さんの店」
「いや、まだだ。散歩に夢中で忘れてた」
「場所はさ、駅の向こうの飲み屋街。『令子』ってスナック」
干場は頷いた。二人は水族館の前まできていた。シンゴの言葉通り、水族館は閉館していたが、併設されているゲームセンターには明りが点り、電子音が外からも聞こえる。

「あっちにも飲み屋街があるだろう」
干場はマリーナの方角を示した。
「うん、大きい店でしょ。イクミがバイトしてる」
「え？」
干場が訊き返すと、シンゴはしまった、という顔をした。
「内緒だよ。昼間会った、シズクってのと、二人でバイトしてるんだよね。『人魚姫』って店で」
「もうひとりのガングロの子か、シズクってのは」
「うん」
「高校生がホステスやっていいのか」
「毎日じゃないよ。それに十一時にはあげてもらうんだって」
干場は首をふった。
「今日はでてるのか」
「今日？　今日はどうだっけ。でてないと思うよ。内緒だぜ、本当に。叔母さんとかにばれたら、ぶっ殺されるっていってたもん」
「わかった」
「じゃ、俺、いくよ」

「ゲーセンか」
「なんか疲れた。帰る」
干場は頷いた。が、思いついたように訊ねた。
「シンゴは釣りできるか」
「釣り？　船から？」
「いや。さっき漁港のぞいたら、アジを釣ってるおじさんがいて、おもしろそうだった」
「アジなら、小学生のとき、よくやったよ。父ちゃんが釣り好きだからさ」
「今度教えてくれよ」
「うーん、いいけどさ。つまんねえよ、きっと」
「そうか」
「じっとしてんのって性に合わないんだよね。釣れるときはいいけど」
「釣れないときがあるから、釣れるのがおもしろいのじゃないのか」
「釣れないときのほうが多いよ。父ちゃんもいっつも母ちゃんに怒られてるもん。『エサ代のほうが高くつく』って」
干場はふきだした。

「なるほどな」
「でもいいよ。ガキんとき使ってた竿があるから、今度教えるよ」
「そうか。俺はさ、しばらくこの先の『みなと荘』って旅館にいるから、暇ができたら、いつでも顔だせよ」
「ケータイは？」
「もってない」
干場が首をふると、シンゴは、
「ええっ」
と声をだした。
「ケータイもってない奴なんているのかよ」
「いるよ、ここに。なくてもぜんぜん困らない」
「よく生きていけるね。友だちとか、いないの」
「いないわけじゃない。だが電話やメールがつながらないからといって駄目になる関係だったら、それは友だちとはいわないのじゃないのか」
「わかんねえ」
理解できないようにシンゴがいった。干場は苦笑した。

「まあいいさ、とにかく声かけてくれ」
「うん。じゃね」
シンゴは頷いて、自転車にまたがった。元気をとりもどしていた。勢いよくこいで、今歩いてきた道を走り去る。
それを見送り、干場は笑みを浮かべた。そして新港町のほうに、再び歩きだした。

5

安河内がバー「伊東」をでたのは、午後九時を少し回った時刻だった。ハイボールを六杯ほど空けていたが、足どりはしっかりしている。
安河内の住居は、岬町の線路に近い、一戸建てだった。安河内の妻がもともと岬町の出身で、二十八のときに山岬警察に赴任した安河内は、上司の勧めで見合い結婚した。
家までは歩いて十分かかるかどうかの距離だ。
六年前に癌でその妻に先だたれ、ひとり娘もよその土地に嫁いでいるので、安河内はひとり暮らしをしていた。仕事帰りに「伊東」で夕食を兼ねた晩酌をするのが日課になっている。
「ただいま」
習慣で、誰もいない家の玄関を開けると、安河内はいった。明りをつけ、家のまん中にあるリビング

にすえられた仏壇の前に、あぐらをかいた。
妻の遺影と位牌に線香を手向け、合掌する。しばらく妻の遺影を見つめていたが、
「どうなるかな」
とつぶやいた。少し離れた座卓に向きなおり、煙草に火をつける。ふだんなら帰って線香をあげるとすぐに、部屋着に着替えるのだが、今日はくたびれたスーツのままだ。
やがて煙草を消し、携帯電話をとりだした。番号を検索し、ボタンを押す。耳にあて、相手がでるのを待った。
「もしもし」
やがて太い、張りのある男の声が応えた。
「勝見先生ですか、安河内です。山岬署の」
安河内が告げると、
「おお」
と男は声をだした。
「久しぶりだね」
「ごぶさたしとります」
「まあ、弁護士と刑事さんがしょっちゅう顔など合わせんほうがいい」
「まったくで」
二人は声をあわせて笑った。
「どうしたね」
勝見が訊ねた。
「実は今日、妙な男に会いましてね。ちょっとお知らせしておこうと思って。干場、というんです。干場功一」
「干場」
勝見がつぶやいた。
「いくつくらいだ」
「三十だといっとりました。旅行者なんですが、ちょっと気になることをいっておったものですから」
「気になること？」
「アメリカ生まれで、母親が向こうにいたミュージシャンと内縁関係で作った子供だと。その母親は、実家に勘当されていて、生まれ故郷には帰らないまま、だいぶ前に死んだそうなんです」
勝見は沈黙した。安河内はつづけた。
「その生まれ故郷というのが、どうやらこの町らし

い、と」
「本物かね」
やがて安河内はいった。
「今のところは何とも。その男は母親が亡くなってからは、父方の親戚に預けられて育ったようなんですな。その後アメリカの大学をでて、父親も亡くなったのを機に、日本に帰ってきた。そこで、母親の田舎がどんなところだか見てみよう、という気になったらしい」
「見かけは」
「大男です。一八〇センチくらいたっぱがある」
「顔はどうなんだね」
「どう、とは？」
「殿さまに似ているのか」
「さあ。あたしは殿さまにはほとんど会ったことがないので。なにせ屋敷にとじこもっておられたでしょう。殿さまの顔がどうだったかなんてよく覚えとらんのですよ」
「ふーん」
勝見は唸り声をたてた。
「で、本人は何といっているのだ」
「それが、何を考えているのかわからんところがありまして。ただ、令子のおっ母さんと話をしたかったらしく、駅前の道を夕方、うろうろしていました」
「令子のおっ母さんて、殿さまの妾だった洋子のことか」
「殿さまは結婚していなかったのだから、妾とはいわんでしょう」
安河内はやんわりといった。
「どうでもいい。洋子と何の話をしたんだ」
「いや、結局、会わずにふらっとどこかへいっちまいましてね。もし本物なら、役所なり勝見先生のところにいきそうなものだと思うのですがね」
「なんで私のところに」
「そりゃ、あれですよ。先生は、殿さまの遺言執行者だったじゃないですか」
「それが何かね」
勝見はいくぶん不穏な声になった。
「いや、別にその……。何というか、殿さまの親族

なら、申し立てることとかあるのじゃないかと思いましてね」
「その男は本当に、干場の人間なのか」
「今のところは何とも。本人もよくわかってないようですし、ことさら殿さまの財産に興味を感じているような節もないのですわ」
「あんた、それを調べられんか」
「といわれましてもね。犯罪の容疑もかけておらん人間を調べるわけにもいきません。身分証を見せてくれというのにも、それなりの理由がいりますんで」
「そんなことはわかっとる」
「そうでした、こりゃ失礼。釈迦に説法でしたな」
安河内は煙草をくわえ、いった。
「何をしたい、とかそういうことはいってなかったのか」
「まあ観光ですな」
「観光?!」
勝見はあきれたような声をだした。
「山岬の何を観光するのだ」
「さあ。ですがけっこう気にいったようで、しばらくこの町におるようなことをいっておりました」
「おるって、どこかに泊まっているのか」
「宿をとったようです」
「どこの旅館だ？」
「先生がお会いになるのですか」
「それはこれから考える。とりあえず調べてみようと思ってな」
勝見は横柄な口調になった。
「『みなと荘』といっとりました」
「『みなと荘』。観光ホテルじゃなくてか」
「観光ホテルは高かったのでしょう。なりとか見る限りは、それほど金をもっているようではありませんでした」
「金がない……」
勝見はつぶやいた。
「ええ。今のところトラブルを起こしそうには見えないのですが、いちおうお知らせしておこうと思いまして」
「うむ、そりゃご苦労さま。いいことを知らせても

らったよ」
「いえいえ。これも仕事ですから」
安河内はいって、電話を切った。煙を吹きあげ、妻の遺影を見やる。
「さてと。何がでてくるかね。ちょいと楽しみじゃないか」
語りかけ、しばらく身じろぎもしなかった。